

## ありきたりの病院臨床場面(医療／心理)に精神分析的モノを導入する際の課題とコツ

司 会：増尾 徳行(上六心理療法室)

河野 恵理(こうの脳神経外科クリニック・精神科心療内科)

趣旨説明：岩倉 拓(あざみ野心理オフィス／臨床心理委員会 委員長)

加藤 隆弘(北海道大学精神科／医療問題委員会 委員長)

話題提供：豊田 佳子(共和病院)

「心的世界と病院組織・コミュニティの二重性を生きること」

岸本 和子(京阪病院)

「精神分析的立場の心理士として、精神科医療の現場にいつづけること」

江崎 幸生(藤田医科大学)

「わからなさから始める力動的臨床 ―大学病院で馴染むために―」

堀 輝(福岡大学医学部精神医学教室)

「精神分析の文化が根付く大学病院精神医学教室に着任して想うこと」

本大会の参加者の多くは、精神分析に関心があり、精神分析の知見を普段の臨床やクライアントの理解に役立てたいと思い参加されていることと思う。しかし、精神分析や週1回の精神分析的精神(心理)療法が実践可能な臨床現場は多いとはいえず、精神分析や力動的な視点を病院やクリニックといった職場内で共有することすら難しい場合もある。まず職場にどう理解してもらうか、どう導入するか、苦労している参加者も少なくないと思われる。あるいは、初めて本大会に参加し、精神分析的なモノが日常臨床に活かせる可能性すら考えたことがない参加者もいるかもしれない。

前大会から、医療問題委員会と臨床心理委員会では、一般臨床場面において精神分析的な視点や理解をどう各々の現場や領域に導入していったか、それぞれの苦労や工夫、経験を話題提供する合同企画を開始した。今回、江崎からは大学病院での力動的な精神科医として経験に鑑みて精神分析を知らない精神科医・研修医・コメディカルに対する精神分析的視点の導入について、豊田・岸本からは精神分析的立場にある心理士として病院での多職種との連携に関して、話題提供する。招聘登壇者の堀からは、伝統的に精神分析的文化のある大学病院に着任した経験を基にして精神分析的臨床の課題や未来について話題提供していただく。当日は、フロアの参加者との討論の時間もできるだけ確保し、各々の経験や工夫、苦労について意見交換できればと思う。